

佳作

大切な宝物

岡山県 岡山県立倉敷天城中学校三年 四方くるみ

「命を大切にしなさい。」

大人はよく、この言葉を子供に言う。しかし、子供たちはそんなの分かっているよと聞き流しがちである。ではなぜ大人たちは子供にその言葉をかけるのだろうか。「命を大切に」とはどういう意味なのだろうか。

小学四年生の春、私が当時小学二年生だった妹と遊んでいた時、父と母が大事な話があるから、と言って私たちを呼んだ。

「どうしたの。」

と聞くと父は言った。

「今、お母さんのおなかに赤ちゃんがいるんだよ。」私は、驚きのあまり声が出なかった。二つ下の妹は、今まで自分の妹や弟を欲しがっていたため、パッと花が咲くように笑顔になり、とても喜んでいて。男の子かな、女の子かなと話す時間はとても幸せで、

みんな新しい家族と会える日をとっても楽しみにしていた。それからしばらくして、私たちは妹の生まれる瞬間に立ち会った。夜中の三時に静かな病院の中でお医者さんの声、助産師さんの走る足音、そして母が必死に頑張っている声が響いていた。私はただ、頑張っていると声をかけることしかできなかった。お母さんの必死な姿を見て、赤ちゃんを一人産むことは私の想像していたものよりも痛く、苦しいことなんだと感じた。それと同時に、なんで大人は苦しい思いをしてまで、赤ちゃんの誕生を望むのか疑問を抱いた。それからしばらくして、赤ちゃんのオギャーという声が部屋全体に響いた。

「おめでどうございます。元気な女の子ですよ。」

助産師さんが産まれたての赤ちゃんを私たちに見せてくれた。赤ちゃんは私の指を小さい手でギュッと握り、小さいながらも必死に生きていることが伝わってきた。それから少しして、私は母に質問をした。「ねえねえ、お母さん。赤ちゃんを生む時痛かった？」

「うん。とっても痛かった。でもね、生まれてきた赤ちゃんを見ると痛みも吹っとなんで、とても幸せな気持ちになったのよ。」

私はその時、命の大きさを知ることができた。生まれてくる赤ちゃんがもたらす喜びは、母の感じた痛み何倍も強くて優しいものなんだと分かることができた。命は親からもらった一番大切な宝物である。私の親も、世界中の人々の親も自分たちの誕生に喜んだことだろう。私は、親からもらった命という宝物を大切に生きていきたい。